大統領奪還指令４

日韓、双璧の戦い

大石英司
Eiji Oishi

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

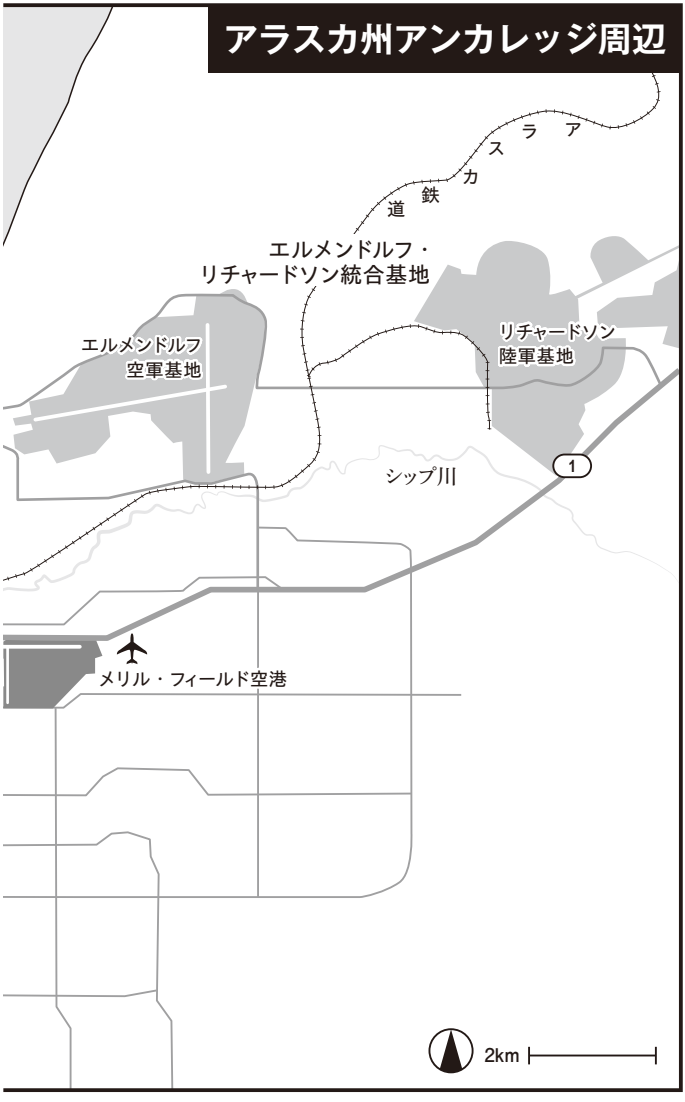
●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

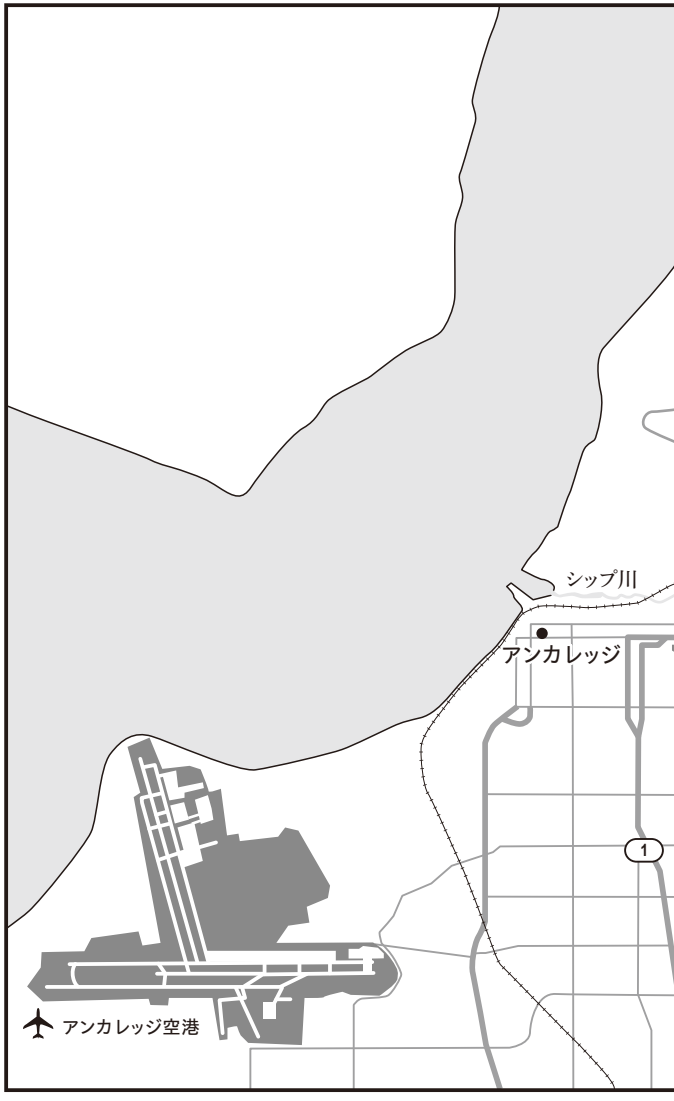
口絵・挿画　安田忠幸

地図　平面惑星

目次

プロローグ　15
第一章　踏み留まる決意　26
第二章　英雄の帰還　43
第三章　特殊戦司令官　70
第四章　語学の達人　98
第五章　J‐36戦闘機　124
第六章　父と娘　149
第七章　日韓、それぞれの戦い　175
第八章　幽霊退治　197
エピローグ　216


アラスカ州アンカレッジ周辺
アラスカ鉄道
エルメンドルフ・
リチャードソン統合基地
エルメンドルフ
空軍基地
リチャードソン
陸軍基地
シップ川
1
メリル・フィールド空港
2km


シップ川
アンカレッジ
1
アンカレッジ空港

登場人物紹介

【日本】

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平（どもんこうへい）　陸将補。北米派遣統合司令官。コードネーム：デナリ。

〈原田小隊〉

原田拓海（はらだたくみ）　三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。コードネーム：ハンター。

待田晴郎（まちだはるお）　一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

〈姜小隊〉

姜彩夏（かんあやか）　二佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課所属。コードネーム：ブラックバーン。

漆原武富（うるしばらたけとみ）　曹長。小隊ナンバー２。コードネーム：バレル。

井伊翔（いいかける）　一曹。姜小隊のＩＴエンジニア。コードネーム：リベット。

姉小路実篤（あねこうじさねあつ）　二曹。ロシア語遣い。コードネーム：ボーンズ。

由良慎司（ゆらしんじ）　三曹。西部方面普通科連隊から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

〈訓練小隊〉

甘利宏（あまりひろし）　一曹。元は海自のメディック。コードネーム：オリンピア。

峰沙也加（みねさやか）　三曹。山登りとトライアスロンが特技。コードネーム：ケーツー。

駒鳥綾（こまどりあや）　三曹。護身術に長ける。コードネーム：レスラー。

瀬島果耶（せじまかや）　士長。〝本業〟はコスプレイヤー。コードネーム：アーチ。

《水陸機動団》

布留川弘（ふるかわひろし）　陸将補。水陸機動団長。

三武啓（みたけはじめ）　一佐。高級幕僚。

司馬光（しばひかる）　一佐。アダック島派遣部隊司令官。水機団格闘技教官。

〈第１水陸機動連隊〉

十和田耕司（とわだこうし）　一佐。連隊長。

〈第３水陸機動連隊〉

後藤正典（ごとうまさのり）　一佐。連隊長。

榊真之介（さかきしんのすけ）　一尉。第１中隊・第２小隊長。

居村真之輔　陸将。防衛装備庁・長官官房装備官。

●海上自衛隊

《北米支援艦隊司令部》

井上茂人　海将。北米支援艦隊司令部司令官。

仲野正道　一佐。艦隊幕僚長。

喜久馬真子　二佐。艦隊情報幕僚。

村谷澄弥　一佐。北米支援艦隊司令部航空幕僚。

《むらさめ型護衛艦〝いかづち〟(6100 トン)》

夕樹達成　二佐。艦長。

追川 涼 太　三佐。副長。

●航空自衛隊

・第 308 飛行隊（F-35 B戦闘機）

阿木辰雄　二佐。飛行隊長。ＴＡＣネーム：バットマン。

宮瀬茜　一尉。部隊紅一点のパイロット。ＴＡＣネーム：コブラ。

●統合幕僚監部

三村香苗　一佐。統幕運用部付き。空自Ｅ-２Ｃ乗り。北米邦人救難指揮所の指揮を執る。

●在シアトル日本総領事館

土門恵理子　二等書記官。土門の娘。

●ロスアンゼルス総領事館

藤原兼人　一等書記官。

●国家安全保障局（ＮＳＳ）

桂 木敬子　参事官。経済担当経済班副班長。

【アメリカ】

●エネルギー省

Ｍ・Ａ（ミライ・アヤセ）　通称・魔術師〝ヴァイオレット〟。Ｑクリアラ

ンスの持ち主。
レベッカ・カーソン　海軍少佐。M・Aの秘書。FA-18戦闘機乗り。

●アメリカ国家安全保障局（NSA）
ギャリー・マクマホン　海軍大尉。コードネーム：〝バンディッツ〟。

●陸軍
〈第160特殊作戦航空連隊〉〝ナイト・ストーカーズ〟
メイソン・バーデン　陸軍中佐。シェミア分遣隊隊長。
ゲーリー・アトキンス　陸軍中佐。第4大隊デルタ中隊。
ベラ・ウエスト　陸軍中尉。副操縦士。新大統領令嬢。
〈リチャードソン陸軍基地〉
クレイトン・マクニール　陸軍曹長。陸軍基地のボス。
ハリー・ヨシワラ　陸軍少佐。第501空挺歩兵連隊第1大隊ブラックフット中隊長。日系人。
〈第311軍事情報大隊〉
ケビン・ルー　陸軍大尉。サイバー・スペース管理小隊。元タイガー・チーム。
メリッサ・バーノン　陸軍少佐。韓国からの移民三世。元タイガー・チーム。
・第2大隊
メグミ・モリアーティ　陸軍特技兵。パイロットTACネーム：〝変異体（バリアント）〟。
・ミルバーン隊
アイザック・ミルバーン　元陸軍中佐。警備会社の顧問。かつてデルタ・フォースの一個中隊を率いていた。

●海軍
・ネイビー・シールズ・チーム7
イーライ・ハント　海軍中尉。
マシュー・ライス　海軍軍曹。狙撃手。

●空軍
ヴァリシャ・カマラ　空軍大佐。ルイス・マッコード統合基地の米空軍上級サービス・コンポーネント司令官。インド系。
テリー・バスケス　空軍中佐。終末の日（ドゥームズデイ・プレーン）の指揮機〝イカロス〟指揮官。
スペンサー・キム　空軍中佐。〝タイガー・キム〟と呼ばれたNSAきってのスーパー・ハッカー。

●ＦＢＩ
ニック・ジャレット　捜査官。行動分析課のベテラン・プロファイラー。
ルーシー・チャン　捜査官。行動分析課の新米プロファイラー。
ロン・ノックス　捜査官。ＬＡ支局・サルベージ班。

●郡警察（テキサス州ノーラン郡）
ヘンリー・アライ　巡査部長。陸軍に二期在籍した選抜射撃手。

●ロス市警
カミーラ・オリバレス　巡査長。ヴァレー管区。

●レジスタンス
ルーカス・ブランク　法学部政治哲学教授。公民権運動の闘士。
リリー・ジャクソン　元陸軍大尉。双発の小型プロペラ機パイパー・セミノール乗り。
サラ・ルイス　海兵隊予備役中尉。スカウト・スナイパー指導教官課程出身。

●クインシーの若者たち
タッカー・トリーノ　ドローン・クラブ〝チェイサー〟の部長。
ベッキー・スワンソン　タッカーの幼なじみで、〝チェイサー〟の副部長。

●国家安全保障局（ＮＳＡ）
エドガー・アリムラ　陸軍大将。ＮＳＡ長官。

●その他
西山穣一　ジョーイ・西山。スウィートウォーターでスシ・レストランを経営。
ソユン・キム　穣一の妻。
田代哲也　西山の会社員時代の後輩。
ディラン・ウエスト　アメリカ大統領。元・上院軍事委員会の重鎮議員。
ダニエル・パク　カリフォルニア州選出下院議員。
ケイリー・ナム　地方判事。韓国系。

【イギリス】

●王立海兵隊

・第 45 コマンドー

エドワード・テナント　海兵隊少佐。Ｙ中隊長。

●イギリス外務省

アーサー・シンクレア　一等書記官。

●民間軍事会社

ダリル・Ｆ・マッキントッシュ　元空挺特殊部隊。陸軍少佐。

【中国】

●人民解放軍海軍

《東征艦隊》 空母〝福建〟（80000 トン）

賀一智　海軍中将。艦隊司令官。

万通　海軍少将。参謀長。

《海軍陸戦隊》 075 型揚陸艦〝海南〟（47000 トン）

楊孝賢　海軍中佐。隊長。

王高遠　海軍少佐。副隊長。

張旭光　海軍大尉。小隊長。

【ロシア】

●海軍

・ウダロイ級駆逐艦〝アドミラル・パンテレーエフ〟（8500 トン）

ダニイル・ウラノフ　海軍中佐。艦長

ハビーブ・カレリン　海軍少佐。副長

サーシャ・シュミット　海軍少佐待遇。軍属通訳。言語学者。

●空挺軍

《第 83 親衛独立空中襲撃旅団》

ヨシーフ・ロマノフ　空挺軍少将。旅団長。

・第 635 独立空中襲撃大隊
イーゴリ・ダチュク　空挺軍中佐。
アンドレイ・セドワ　空挺軍中佐。旅団参謀。

【韓国】

●陸軍
洪景求（ホンギョンゲ）　陸軍中将。北米韓国軍統合司令官。
柳輝昭（ユ フィ ヴ）　陸軍退役少将。
白優営（ペク ウ ヨン）　陸軍准将。第 201 迅速対応旅団長。
李承敏（リー スン ミン）　陸軍大佐。参謀本部作戦課長。
尹仁國（ユン イン グク）　陸軍少佐。第 707 特殊任務大隊中隊長。
呉恩宇（オ ウン ジュ）　陸軍少佐。
黄侑珉（ファン ユ ミン）　陸軍大尉。小隊長。

【国連機関】

●国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）
シャーロット・シンクレア　副代表。アーサー・シンクレアの叔母。

●国連児童基金（ＵＮＩＣＥＦ）
柊木恵（ひいらぎめぐみ）　ＵＮＩＣＥＦシニアスタッフ。
マヌエル・シュナイダー　ドイツ人スタッフ。
アリア・リンカーン　インターン。テキサス大生。

大統領奪還指令４　日韓、双璧の戦い

プロローグ

ニューヨーク・マンハッタン島は、真夏のスコールに煙っていた。そのマンハッタン島の東側を流れるイースト川に浮かぶ一本の槍のようなルーズベルト島では、救急車がサイレンを鳴らして走り回っていた。

まだ夜明け前から、激しい銃撃戦がその小さな島の北端で起こっていた。闇夜に乗じて、暴徒らが対岸のマンハッタン島から密かに上陸してきたのだ。

イースト川上流部から漕ぎ出せば、後は緩やかな川の流れに乗るだけで済む。船外機は必要なかった。

島の治安を守るためにそれなりの数の武装ボランティアが配置されていたが、気付いた時には、すでに十名を超える武装した連中が、島の北端にあるライトハウス公園に上陸した後だった。

公園の南側には、ホスピスやリハビリを専門に扱うコラー専門病院がある。ルーズベルト島は、南北には長いが、東西は極端に狭い島だ。南北は二マイル近い長さがあるが、東西の幅は、せいぜい二〇〇ヤード強しかない。

島には、世界の外交使節団が踏み留まっていた。つい先日までは、ここをイギリス軍海兵隊が守っていたが、米軍が、自軍部隊同士での戦闘に突入

したことから、いったん東海岸から撤退していた。
もっとも、その外交使節団は、イギリス軍が展開する以前から、ルーズベルト島に留まり、自警団を編成して、マンハッタン島から脱出してくる避難民を分け隔てなく保護していた。
彼らの本来の目的は、マンハッタン島から脱出しそびれた自国の居留民保護だったが。
英仏独、極東からは、日韓の外交官も留まっている。中国も参加を表明したが、これは欧州外交団がやんわりと断った。だが、中国人の居留民もまだそれなりの数が留まっている。
しばらくは、マンハッタン島と周囲を結ぶ客船が細々と運航されていたが、燃料も尽き、また島内からの狙撃もあって運航停止に追い込まれていた。
島と周辺を往き来する橋や地下鉄、トンネルなどは、とっくに炎上した後だった。つまり、今もマンハッタン島に留まる人々は、島から脱出する術はなかった。そして、その島は今、銃と暴力によって支配されていた。文字通りの無法地帯だった。
ありとあらゆる商業ビルや高級アパートメントが略奪に遭っていた。警察活動はとっくに崩壊し、消防車もすでに燃料を使い切っていた。
マンハッタン島内はもとより、ここルーズベルト島も、ライフラインは全て死んでいる。
生きている電気は、僅かに太陽光発電で動かせるもののみだった。
海外のメディアが、時々島外からドローンを飛ばして様子を探っていたが、セントラルパークには、人間の死体を並べて描いた「SOS」の人文字すらあった。
ルーズベルト島の外交使節団は、特に指揮官を設定していたわけではないが、マンハッタン島に

残された外国人の中では、イギリス人が最大規模だろうという推定で、イギリス外務省が仕切っていた。

ブリタニア王立海軍兵学校、通称〝ダートマス〟の卒業生でもあり、銃の扱いを知っているイギリス外務省一等書記官のアーサー・シンクレアが指揮を取っていた。

つい数日前は、イギリス軍海兵隊の尽力で、マンハッタン島へと通じるクイーンズボロ橋を啓開し、対岸に橋頭堡を構築して、そこから徐々に治安回復しつつ外国人居留民を救出するプランが進行していたが、英国軍の北米からの撤退で惨めにも挫折する羽目になった。

他に軍事部隊はおらず、シンクレアは、難しい立場に立たされた。補給物資の搬入も途絶え、各国外交団からは、ここルーズベルト島からの撤退案すら出ていた。

しかし、シンクレアは、打てる手は打ったつもりだった。海兵隊が撤退した直後、近くのラ・ガーディア国際空港に飛んできた最後の支援機に、外務省が雇った民間軍事会社のコマンドを乗せることができた。

乗っていたのは、ほんの十数名の分隊規模だったが、全員が特殊空挺部隊（SAS）や特殊舟艇部隊（SBS）の出身者だった。そして普段は、外務省対外情報部（MI6）との協力関係にもある、信頼できるチームだった。

シンクレアは、海兵隊とともに、彼らをマンハッタン島に上陸させ、精鋭チームによる掃討作戦を決行するつもりだった。

海兵隊が引き揚げたことで、その計画は棚上げになったが、今はここを支えてくれている。彼らがいなければ、ルーズベルト島は、ほんの一時間で暴徒らに占領されていたことだろう。

ロングアイランド側と繋がる唯一の車道橋、ル

ーズベルト橋から北へ三〇〇ヤード地点にある消防署に、臨時の指揮所が設けられていた。車庫の南隣に常設されている整備用のパイプハウスの中に、指揮所はあった。雨が屋根を叩くせいで、あまり静かな空間ではないが、停電でエアコンが落ちたままの室内よりは、いくぶんしのぎやすい。

今年の夏は、ニューヨークも暑かった。

この島の消防署は、全く普段通りに機能している。それどころか、マンハッタン島内の消防署から避難してきた消防隊員で、普段の四倍の人員を回していた。

消防隊員が操縦するドローンが、島の北端上空を舞っている。

タブレット端末に転送された映像を見て、シンクレアは軽くため息を漏らした。敵の数が減らない理由がようやくわかった。

この雨の中、マンハッタン島との間を往復して、武装した人間をピストン輸送しているプレジャーボートがいた。

「野球場の補給物資は、彼らもドローンで見て知っていることだろう。あれを手にできれば、マンハッタン王国のキングになれる……」

外から帰ってきたダリル・F・マッキントッシュ少佐が、ポンチョを脱ぎながらそう言った。ベテランのマッキントッシュは、陸軍SASの出身だった。民間軍事会社に転身し、MI6の汚れ仕事を請け負うようになってすでに五年が過ぎていた。

「雨が激しくなって、敵の攻勢はやんでいるが、こうして兵隊が補充され続けるとなると、雨が止んだ途端に仕掛けてくるだろう。ここを放棄する計画も練っておかないと?」

「それは駄目です、少佐。この消防署を失ったら、そのすぐ背後のルーズベルト橋を守り切れない。

島からの脱出手段も、安全なロングアイランド側からのアプローチも失うことを意味する」

ルーズベルト橋を渡ってすぐ左手の野球場に、マンハッタンへと運び込む予定で積み上げた数十トンの支援物資が置いてあった。敵の目的はその物資だった。

「島の北端まで辿り着けない限り、上流部から流れに乗って近付いてくる敵のボートは制圧できない。ロングアイランドの対岸に渡って、狙撃することも考えたが、島影になる部分はあるし、ここから一・五マイルはあって、配置にはそれなりの時間が掛かる」

「対岸のレイニー公園に狙撃手を潜ませて、イースト川越えで、上陸した後を撃たせるのは？」

「もちろん、それも考えた。ほんの三〇〇ヤードだから、狙撃は可能だ。だが、連れてきた狙撃チームは一つだ。狙撃は、デリケートな作業で、そちらに配置すると、ここの正面ががら空きになる」

「消防士に銃を持たせている状況をなんとかしないと……」

ラジオからBBC放送が流れている。女性ががなり立てているインタビュー音声が聞こえていた。記者が、場所はヒースロー空港だと言っていた。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）副代表のシャーロット・シンクレア女史が、北米からの撤退を決めた英国政府を厳しく非難する内容だった。貴族とは思えない汚い言葉を使い、ほとんど、罵っていた。

「ご姉弟か何かの関係で？」

「いえ。叔母です。まあ、お聞きの通りの性格ですけどね。ダラスから退去する直前に、衛星携帯で少し話をしました。もううんざりしたとかで、疲れ果てた感じだった」

「アフリカの某国で、一度、彼女の護衛任務に就

いたことがある。ほんの数日の仕事だと割切ったが、ああいうやり手の上司と長い期間一緒に仕事するのは大変だろうなと思ったよ。だが、影響力は持っている人らしい。帰国した彼女が、ほんの数日、ロンドンで暴れ回れば、少しは世論の風向きも変わるかもしれない」

「そこから、支援物資とともに英軍が戻ってくるにはさらに日数が掛かる」

遠くで、雷鳴が轟いた。最初、雷鳴だと思ったが、そうではなかった。マッキントッシュ少佐が、ドローンで水面を捜索するよう命じると、カメラの視界から外れた所を走っていたプレジャーボートの残骸が、バラバラになって川面を下っていた。

「ミサイル攻撃だ！――」

と操縦士のタブレット画面を見る少佐が言った。

「ドローン攻撃ではなくて？」とシンクレアが尋ねた。

「ここまでの破壊をドローンから落とす爆弾でやってのけるには、それなりの重量の爆弾と、それを運べるヘビー級のドローンが必要になる。そうなると、対戦車ミサイルの方が遥かに軽くなる」

マンハッタン島からこちらへと向かっている途中だったはずだが、生存者はいない模様だった。少なくとも、水面に浮かんでいる人間はいない。

「ミサイルなんて誰が……」

「どこかに、強力な武器を持つ味方がいるようだ」

その答えは、一〇分ほどしてわかった。ルーズベルト橋を渡ってくる二台の車両がいた。先頭を走るのは、空港のトーイング・カーで、武装した英兵が荷台に乗っていた。後方の乗用車は、ルーフから一人の兵士が身を乗り出して周囲を警戒していた。

島側の検問所で、指揮所の場所を教えられて真

っすぐ消防署へと向かってきた。

〝ダートマス〟でシンクレアとともに学んだ海兵隊の中隊指揮官エドワード・テナント少佐が乗用車の助手席から降りてきて、パイプハウスの中に駆け込んだ。

イギリス海兵隊（ロイヤル・マリーン）第45コマンドー（大隊相当）Y中隊を率いていた。このフォー・ファイブ・コマンドーとして知られる部隊は、しばらくこのルーズベルト島に留まり、支援活動と防衛に当たっていたが、マンハッタン島の治安回復という目的を達することなく撤退していった。

彼らはいなくなったのだ。

テナント少佐は、シンクレアと軽くハグして「無事で良かった！」と帰還を報告した。

「どこにいた？　いつ戻ったんだ？」とシンクレアが聞いた。

「長い話になる。本隊はいったんカナダ領まで引き揚げた。われわれは殿（しんがり）部隊としてラ・ガーディアに留まったが、最後に降りてきた支援機に乗っていたのが、マッキントッシュ少佐の精鋭チーム。その最終便に乗って米領土から出る予定だったが、エンジン・トラブルが生じて足止めされた。他にも、空港に放置された整備不良な民航機もあったので、政府はメーカーから大量のエンジニアと必要な整備部品を送り込むことにした。その最後の一機が飛び立つまで、Y中隊が空港警備を担うことになり、今度こそ、その最終便で引き揚げる予定だった。この北米大陸から完全にね。

ところが、状況が変わった。政府は方針を変更して、この北米に留まり、支援を継続することになった」

「そりゃ凄い！　しかし初耳だぞ？　全く聞いてない話だが……」

「外務省辺りで、今、どの程度の関与に戻るか検

討中のはずで、われわれは単に、先遣隊に過ぎない。中隊をどう配置するかは、基本的に私に委ねられているので、ひとまず、この島の安全のために、二個小隊を連れてきた。今、ロングアイランド側で、島の北部に上陸して敵を掃討する作戦を練っている」

「もう一度聞くが、いったい何があった？」

この急展開が、シンクレアにはさっぱり理解できなかった。てっきり、見捨てられたと思っていたのに。

「君の叔母さんか？　シンクレア女史は、カナダ経由でヒースローに引き揚げる機内からも政府や議会関係者に電話を掛けまくって吠えたらしいし、欧州では今、『アメリカはＮＡＴＯから脱退するぞ！　この恩知らずどもが――』というアメリカ市民の絶叫動画が何十本もバズっている」

「ＮＡＴＯの一員でなかったとはいえ、ウクライナを見捨てたくせにか」

「それと、カリフォルニアの状況。ロスアンゼルスは、まだまだ一部だが、電力が復旧しつつある。西海岸から、この治安は徐々に復旧するだろう。何より、日本の行動が大きかった」

「彼ら、シアトルから撤退したと聞いているが？　ここに留まっている日本の外交官によると」

「その予定だったことは事実らしい。現に昨日は、マッコード空軍基地を守っていた空軍とともに、かなりの犠牲を払ったと聞いた。それが一転、日本政府は、北米に留まり、引き続き、軍事的支援と物資の支援を継続、拡大させる、と表明したそうだ」

「まさか！　日本は、青信号を見ても横断歩道を渡らないほど臆病で出不精なのに」

「中国軍が、アンカレッジに上陸してきたことと関係があるかもしれない。米側は長らく混乱して

いたが、ＮＡＴＯの第５条の発動もヨーロッパ各国に求めてきたことだし」
「そのアラスカ奪還の部隊がアラスカに到着するのは、一ヶ月後だろうな。そもそも日本には、アメリカの戦争に参加する義務もないはずだが」
「私もその辺り、ミステリーだとは思うが、日本が留まると宣言して、それなりの犠牲も払った以上、兄弟国のイギリスがアメリカを見捨てるというわけにもいかない。それなりの議論を経て、戻ってくると決めたことだろう。そんなわけで、マンハッタン解放作戦は、再始動することになる。マッキントッシュ少佐には、引き続き協力して頂けると助かる。前回は、クイーンズボロ橋を放置車両を一台一台引っこ抜いて対岸に渡ろうとしたが、今回は、ボートで渡河し、まず橋頭堡を確保した後に、橋を掃除して兵站ルートを確立しようと思う」
「軍はそんな乱暴な作戦を許可するのか？」
「国防省は、むしろ積極的にやれ！　と言ってきた。マンハッタン解放へと向けて、英軍が橋頭堡の確保に成功した！　というニュースが流れれば、世論の支持も得やすくなるだろうという読みだ」
「最初から、それをやっておくべきだったな」
「同感だ。失った時間は貴重だが、取り戻せる。守りから攻めへと切り替える。他のＮＡＴＯ諸国の足並みが揃うかどうかはまだ疑問だが、少なくとも東海岸の状況は、少しずつ好転するだろう。しかし、中国軍は、一週間前にも西海岸に攻撃を仕掛けたはずだが、どうしてアメリカは第５条の発動を求めなかったんだろうな？　ＮＡＴＯを自動参戦させれば、われわれは否応なく、アメリカの治安回復にも参加せざるを得ない」
「理由は単純だ。アメリカは西側同盟国の援助は歓迎するが、大規模な武力行使は容認しない。彼

らは、それを口実にして、NATO諸国がアメリカを占領し、民主主義の再教育に乗り出すことを恐れている。日本や韓国なら、そんな偉そうな態度は取らないからな」

「なるほど。しかし酷い雨だな……」

土砂降りの雨が、地面に叩きつけていた。

「マンハッタンなら、雨宿りできるビルはそこいら中にある。この雨は、地上に放置された汚物も洗い流してくれる」

「本国に、ニューヨークの天気予報を遣すよう要請するよ。あと、シンクレア女史に、お礼の電話も入れておいてくれ。貴方の尽力で、マンハッタンの状況は改善されるだろうと」

テナント少佐は、マッキントッシュ少佐と大まかな作戦を話し合うと、乗用車に乗り込んでいったん島を出ていった。

アメリカは、内戦状況に陥っていた。大統領選の結果を巡る各州の大陪審判決に端を発した民主共和の小競り合いは、ロシアの策謀による大停電も重なり、大暴動へと発展。ホワイトハウスは暴徒に包囲され、行政府機関は麻痺し、やがて、上下水道やガス、インターネットなどの主要インフラも全て停止した。

人々は、まだ電気が残っている各州へと大移動を開始し、あるいはカナダへ、海外へと脱出を図っていたが、日を追うごとに、それら避難地となった州の電気も落ち、終末世界と化していた。

ここニューヨーク、マンハッタンは、島と外を結ぶ全ての橋、トンネル、地下鉄が放火された。車道に至っては、大渋滞を起こしている車に火が点けられた。

多くの住民、外国人がマンハッタン島内に取り残され、文字通りの無法地帯と化したディストピ

アで、救いの手が差し伸べられる瞬間を待っていた。

各国が、軍隊を北米大陸の沿岸部に派遣して細々と活動していたが、アメリカ軍内部も分裂し、ついに自軍部隊同士での戦いが始まり、欧州各国軍は、一時的な撤退を表明して東部諸州から引き揚げていった。

西部では、ワシントン州シアトルには自衛隊が留まり、韓国軍はカリフォルニア州ロスアンゼルスに留まって戦っていた。

韓国は、本国から派遣した大勢の電力会社作業員の尽力により、ＬＡダウンタウン地区の電力復旧に成功していた。

一方の自衛隊は、夥(おびただ)しい犠牲を払いつつも、いったん引き揚げることを表明したシアトルに留まり、今も戦っていた。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。